

連載コラム



みずき野と その周辺の 植物と昆虫



第41回

花壇の花(2)

～シバザクラ、チューリップなど～



もとよし ふさお
本吉 総男

2018年3月

3月下旬～4月は春たけなわ、百花繚乱のシーズンです。前回に続き花壇に咲く春の花々を紹介します。

1 チオドクサ

チオドクサはキジカクシ科の植物です。チオドクサの仲間は数種ありますが、日本でチオドクサと称して栽培されているものは主にチオドクサ・ルシリアエという種で、花は早春から4月頃まで咲きます。

チオドクサ・ルシリアエの原産地はトルコ西部の山岳地帯で、雪解けの頃に咲き始めるそうです。そのためか、英語では Glory of the Snow (雪の栄光)とよばれています。原種は淡い青紫色で中心が白い花をつけますが、今では、白、ピンク、赤、青など、さまざまな色の花をつける栽培品種がつくられています。この写真のチオドクサも、それらのうちの一品種です。



チオドクサ 3月下旬 第2調整池花壇

2 ムスカリ



ムスカリ 3月下旬 第2調整池

ムスカリはヨーロッパ東南部からコーカサスにかけて原産するキジカクシ科の植物です。ムスカリには多数の仲間がありますが、主として栽培されているものはムスカリ・アルメニアクムという種からの改良品種で、3月下旬～4月に開花します。みずき野では、第2調整池や中央広場の花壇によく見かけます。

ムスカリはヒアシンズに近い植物で、花の様子から英語ではグレープ・ヒアシンズとよばれています。

3 ヒナゲシ

ヒナゲシはヨーロッパ南部から西アジアに原産するケシ科の植物で、真っ赤な花をつけます。花壇では原種または原種に近い赤い花をつけるものが普通に栽培されていますが、白やピンクの花をつける品種もあります。近縁のケシはアヘンがとれるので、栽培が禁止されていますが、ヒナゲシはアヘンを含まないので、自由に栽培することができます。

ヒナゲシは一名「^{ぐびじんそう}虞美人草」といい、夏目漱石の小説の題名にも使われています。^{ぐびじん しん}虞美人は^{そおう}秦を滅ぼした^{こうう}楚王である^{こうう}項羽の^{りゅうほう}愛妃で、^{こうう}項羽が^{りゅうほう}漢の^{りゅうほう}劉邦との^{がいか}戦い(垓下の戦い)に^{こうう}破れ、^{こうう}項羽に先立って自殺した美女です。^{こうう}項羽と^ぐ虞美人が死んだのは紀元前202年のことと伝えられています。



ヒナゲシ 4月中旬 第1調整池花壇

^{がいかのうた}垓下歌 ^{こうう}項羽

力^{ちから}拔^ひき山^{やま}今^{いま}気^き蓋^{おお}世^よ
 時^{とき}不^ふ利^り今^{いま}騅^{すい}不^ふ逝^し
 騅^{すい}不^ふ逝^し今^{いま}可^い奈^な何^{なん}
 虞^ぐ今^{いま}虞^ぐ今^{いま}奈^な若^{じやく}何^{なん}

力^{ちから}、山^{やま}を^を抜^ひき、気^き、世^よを^を蓋^{おお}う
 時^{とき}、利^りあ^あら^らず、騅^{すい}逝^しか^かず
 騅^{すい}の^の逝^しか^かざる、奈^な何^{なん}す^すべ^べき
 虞^ぐや^や虞^ぐや、若^{じやく}を^を奈^な何^{なん}せん

注: ^{すい}騅は愛馬の名。 ^ぐ虞は ^ぐ虞美人^{ぐびじん}のこと。

(自分は山を引き抜くほどの力と、世を覆い尽くすほどの意力があつた。ところがどうしたことか、急に不利な状況になってしまった。愛馬の騅も行こうともしない。騅が行かなければどうにもならない。いとしい虞よ、おまえをどうしたらいいのだろう。)

この漢詩は中学時代に習ったことがあります。

実際は、ヒナゲシが中国に入ったのは、唐の時代(618～917年)だそうですから、^{こうう}項羽も^ぐ虞美人もヒナゲシを見ていないはず。ずっとのちの世の人が、妖艶なヒナゲシを見て^ぐ虞美人を連想し、^{ぐびじんそう}虞美人草と名付けたのでしょ。

4 セラスチウム

セラスチウムは乾いた場所を好み、日当たりのよいロックガーデン(岩石を配置して、植物と組み合わせ、自然を模した庭園)には常連の植物です。葉には綿毛が密生していて銀白色。花壇では、他の派手な花の引き立て役です。原産はヨーロッパで、野草のミミナグサやオラ



セラスチウム 4月下旬 5丁目遊歩道花壇

ンダミミナグサを含むミミナグサの仲間。園芸上はセラスチウムの名で流通していますが、植物学ではシロミミナグサと呼ばれます。

花は白色で、形はミミナグサに似ていますが、ミミナグサの花が直径8ミリ程度しかないので、セラスチウムの花は2センチほどあり、花もまた鑑賞の対象になります。

5 スイートアリッサム

アリッサムとよばれている植物に、アリッサムとスイートアリッサムがあり、両種ともアブラナ科の植物です。植物学ではアリッサムをイワナズナといい、スイートアリッサムをニワナズナといいます。両種とも南ヨーロッパに原産し、日本では園芸植物として花壇を彩っています。

みずき野の花壇に見られるものはスイートアリッサムです。丈は低く、花は小さいのですが、地面を覆うように広がって、非常にたくさんの花を密生して咲かせます。花は白色のものが多く見られますが、ピンクや紫の花をつける品種もあります。



スイートアリッサム 4月下旬 第2調整池花壇

6 ミヤコワスレ

ミヤコワスレは、本州、四国、九州に分布する日本固有種のミヤマヨメナ（別名ノシュンギク）を改良したキク科の園芸品種です。花期は4月～6月。江戸時代から改良が進み、本来の青い花のほか、赤や赤紫の品種もあります。日本の花に特有の美しさと奥ゆかしさを感じさせる植物です。



ミヤコワスレ 4月下旬 第2調整池花壇

7 トウダイグサの一種

文化財公園の石垣の下に、見たことのないトウダイグサの一種を見つけました。ノウルシという野生種になんとなく似ているのですが、葉の形が違います。いろいろ調べた結果、ユーフォルビア・オブロンガータという植物によく似ていることがわかりました。

ユーフォルビア・オブロンガータはバルカン半島、エーゲ海の諸島、トルコ北西部に原産し、ヨーロッパでは園芸植物として栽培されているようです。しかし、インターネットで調べてみても、この植物が日本で販売されている証拠は見つかりませんでした。なぜこの植物がここに生えているのか、不明です。



ユーフォルビア・オブロンガータと思われる
4月下旬 文化財公園石垣下

8 シバザクラ

シバザクラは北米原産のハナシノブ科の植物でフロックスの仲間です。茎が地面を覆うように広がり、非常に多数の花をつけます。丈夫な植物なのでグランドカバー（地面を覆い隠すように広がって、庭園を美しく見せる植物）としても最適です。英語では、モス・フロックス、つまり「コケのようなフロックス」といい、その性質をよく表しています。日本語のシバザクラという名前からはフロックスの仲間であることは想像が付きません。

日本には、シバザクラの名所が多数あり、いずれもシバザクラの絨毯^{じゅうたん}がモザイク状に配置され、その景観は地面に描かれた抽象絵画のように見えます。



シバザクラ 4月下旬 第2調整池花壇

9 チューリップ

チューリップはユリ科の植物で、通常、鱗茎^{りんけい}(園芸では球根とよばれる)によって増えますが、種子もつくります。牧野富太郎は「花としてはととのった形をしています、実を結びません」(『牧野富太郎植物記4 庭の花』(あかね書房))と述べていますが、これは間違いで、チューリップにも種子がつきます。交配によってついた種子をまくことによって、いろいろな品種がつけられています。

チューリップはオランダを中心に、ヨーロッパで多数の品種がつけられたので、ヨーロッパ原産と考えられがちですが、正しくはチューリップの故郷は中央アジアの山岳地帯です。パミール高原^{てんざん}に生まれ、天山山脈の谷間に広がったと考えられています。原種は改良されたチューリップより茎が短く、花が小さいのですが、中央アジアの冬の厳し



チューリップ 4月中旬 第1調整池花壇

昨年(2017)は桜の満開が例年より遅く、4月中旬でした。そのため、チューリップと満開の桜を一緒に写真に収めることができました。

い寒さにも、夏の乾燥にも耐える丈夫な植物でした。この地帯で花の色や形が少しずつ違うものが見られるようになりました。

野生のチューリップに魅せられ、それらの栽培を始めたのは紀元前の古代トルコ人でした。チューリップがヨーロッパに入ったのはずっとのちのこと。1554年、神聖ローマ帝国の大使ビュスベクによってトルコからヨーロッパにもたらされたのです。チューリップという名は、ターバンを意味するトルコ語 tulband(トゥルバンド)に由来します。

チューリップが日本に入ったのは、江戸時代の文久年間だそうで、このエキゾチックな花を初めて見た人はずいぶんびっくりしたことでしょう。ちょんまげ姿とチューリップはどうにもしっくりしない組み合わせです。でも本格的に広まったのは明治時代のことです。西洋文明の浸透とともに、チューリップも日本人に馴染みの花になっていったことでしょう。

「サイタ サイタ チューリップ ノ ハナ ガ・・・」(詞:教育音楽協会 作曲:井上武士 昭和7年)。幼児にクレヨンと画用紙を渡し、花の絵を描いてごらんと言えば、たいていの子どもはチューリップを描くのではないかと想像します。無邪気で明るいチューリップは大人にも子どもにも愛される花です。

次に、チューリップに関する歴史上の重大な出来事について述べておきます。

ヨーロッパの中でも、オランダがチューリップ栽培の中心でした。オランダでは、17世紀までに、チューリップのたくさんの品種が作られ、チューリップの球根に想像を絶する高値がつくようになりました。1634～1637年にはアムステルダムを中心に、チューリップ取引ブームによる投機の加熱によって、「チューリップ恐慌」が起きました。金持ちのチューリップ愛好者(チューリップマニア)の需要に便乗して、チューリップの球根が投機の対象になり、球根がとてつもなく高騰しましたが、1637年を境にその価格が暴落したのです。これは、資本主義経済の初期段階における代表的恐慌といわれています。

マイク・ダッシン(Mike Dash)はその著書“Tulipomania”(Penguin Random House)の中で、1636年12月頃のパフレットに、あるチューリップの球根1個の価格が3000ギルダーと書かれていると述べています。この価格は、太った豚8匹、太った雄牛4頭、太った羊12匹、小麦24トン、ライ麦8トン、ワイン2ホッグスヘッド(約477リットル)、8ギルダーのビール樽4個、バター2トン、チーズ1000ポンド、銀製のカップ1つ、布地1包、ベッド1台、500ギルダーの船1艘のそれぞれの価格を合計した金額に相当するそうです。

当時は、白い縞の入った花が咲くチューリップの球根がチューリップマニアに愛好されました。前述のとてつもない高価なチューリップもおそらく斑入りふのものであったに違いありません。



ヤン・ブリューゲル(子)による
「チューリップマニアの寓意」

1640年代

(ウィキメディアよりダウンロード)

注:ヤン・ブリューゲル(子)は17世紀の画家。ヤン・ブリューゲルという名の画家は二人います。父と子ですので、ヤン・ブリューゲル(父)、ヤン・ブリューゲル(子)として区別します。ヤン・ブリューゲル(子)の祖父は有名な「バベルの塔」を画いたピーテル・ブリューゲルです。

このような縞入りのチューリップは今ではレンブラントチューリップ (Rembrandt Tulips) と総称されています。レンブラントの活躍の時期がチューリップマニアの時代と重なり、この時期のチューリップの絵を見ると、ほとんどの花は白い縞が入っています。レンブラントチューリップという名称は、あたかもレンブラントの絵から名付けられたように思われますが、実は、レンブラントによるチューリップの絵は少なくとも現存するものはひとつもないそうです。

ところで、花に生じた縞はウイルスによる病徴びょうちょうであることがずっと後になって分かりました。チューリップモザイクウイルスまたはレンブラントチューリップ斑入りふウイルスによって引き起こされる、チューリップにとっては最も怖い病気のひとつです。このウイルスはアブラムシの媒介によって他のチューリップやユリにどんどん伝染し、薬では治すことができないので、病徴びょうちょうが出たチューリップは引き抜いて焼いてしまうほかありません。しかし、17世紀のチューリップマニアは、ウイルス病かかに罹った球根を法外な値段で買ったものです。

確かに、斑入りのチューリップは人目を引く美しさがあります。そのためか、最近ではレンブラントチューリップそっくりの斑入りチューリップが交配によってつくられ、販売されています。みずき野の花壇に植えられたチューリップの中にもそのような花を見つけましたので、下に写真を載せておきます。



斑入りチューリップ 4月中旬 第1調整池花壇